

# 西真寺 寺報

平成三十年 夏号

です。沙弥すなわち求道者たる教信は、村人に阿弥陀丸と呼ばれた無名の聖であつたのです。（『十因』）

## 住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますます健勝にて念仏相続に御積勵のことと、お喜び申し上げます。

二月の新年会の落語は、当山の御門徒さん以外の方も訪れ、大変好評でした。この際、落語は仏教の説教から始まり、様々な芸能の基が踊金仏であると説明させて頂きました。徳島の阿波踊りなどの盆踊りも踊金仏が深くかかわっています。「踊る阿呆を見る阿呆」とは、お互いにアホさ加減を見抜き、共感した一体感から生まれた言葉でしょう。落語家が、躊躇なくアホさを表現してくれる姿に対し我々の内にある「アホさ」が共鳴して笑いに転ずるのです。

すなわち、お互いに「凡夫」であることの安心感が一体性を生むのです。金仏の心に触れた新年会でありました。

合掌 釋直徳

親鸞聖人は、「我は是れ賀古の教信沙弥の定なり」と言い、「某親鸞閉眼せば、賀茂川にいれて魚にあたうべし」（『改邪鈔』）と言いましたとされ、無名の非僧非俗の念仏者として沙弥像を生きたことがわかります。越後に流罪された親鸞にとつて、貧困や災害、飢饉に苦しむ農民と共に生き、死んで往ける場所にある救済こそが眞実の世界を映す鏡であつたのでしょう。

佛教の戒律と非常に似ており、「不殺生」の立場を強調する宗教にジャイナ教があります。ジャイナ教は、仏教と同様にバラモン教（注）を源流に持ち、不殺生を維持する為に、仏教とは異なり、世俗の信者に対しても生き物を殺すことに繋がる労働を禁じていました。

このジャイナ教の立場は、持戒仏教の僧侶と同様に、勤労を罪として禁じ、無為徒食を貫き、犯罪を最小限に抑制しています。しかしその反面、バラモン教の信仰を取り入れ、カースト制度を認めているのです。

教信は法相宗、興福寺の優れた学匠で、回心の後西方淨土を願い、賀古の草庵に妻子と共に住み、昼夜に金仏を唱え夢の中にまで称名した捨て聖でありました。

教信は、髪も爪も切らず、衣も袈裟も掛けず、托鉢もせずに農民の手伝いをしながら生きていた僧侶だったのです。また、仏像も経典類にも執着せず、死後は鳥に自分の屍体を食べさせたそ

松野純孝はこの立場に対し、「人間の生産活動を禁止することは、人間を殺すことでもある。自分たちだけ、手を汚さないで、他の人たちに殺生の生産活動をさせ、そうした他人の犠牲のうえで、知らん顔をして、自分の生命をつないでいくというのである。そうとすれば、不殺生に努め、犯罪最低といつた輝かしさも、けつきよくは、偽善といわれても仕方がないのではないか。もつと、本質にそくして考える必要があるのでないであろうか」と提言しています。（『親鸞の開眼』1670年）

松野が提言した本質とは、人間の自然原理に即した求道のあり方を示していると考えられます。（次号に続く）

### （注）バラモン教

厳しい苦行を続けると、超能力を身につけ輪廻転生（前世の行為が今世に反映される思想）から解脱する信仰。また、当時カースト制の最上位にバラモン教の僧侶が位置しており、釈迦はバラモンを否定した事から仏教を広めた。この世界観は現インドにおけるヒンズー教やオウム真理教の教義に共通している。

### ■脳死の問題と仏教②

多額の移植費用を必要とし、その費用を捻出するための募金活動は、先天性心臓疾患を持つ子どもに対する同情や憐れみとして人々の賛同を得ています。しかし、「他人の死を待つ身になる」という移植提供を待つ家族の心情の後ろ盾として機能し、本当のいのちを考える機縁を奪っているのです。

アメリカの場合、脳死者の三割が交通事故、二割が銃による事故と言われます。脳死を待機する家族は、週末が待ち遠しくなります。なぜならファミリー層が車で外出して事故になる率は圧倒的に週末が多いからです。私たちは、無意識に他人の事故死を望む生き方にも共感している傍観者の立場でいるのです。

もし心臓移植が成功しても拒絶反応と戦い、その為に感染症で苦しむことは一生避けられません。そして、現在のアメリカ社会で急増している、心臓移植から「自己不一致」に苛まれる精神疾患者が多いことも否定できません。

彼らは、心臓提供者の虚像を探し求め、自己のアイデンティティ

イのルーツを巡り、一生さまよい続けるのです。若者から心臓移植を受けた八十歳の女性は、亡き若者と同様に車の運転が荒くなり、スピード狂になつた事実が報告されています。今後は心臓提供者の家族や心臓移植者たちの支援法や悲嘆ケアを含めた心のケアを整備化する必要があるでしょう。

子どもは、親の支配下に置かれた機械やモノではないのですし、所有物でもないとする考えは親として当然の在り方です。一方、故障すればペーツを取りかえればいいという脳死の考えは、子どもの人格やいのちを真に尊重した結果と言えるのかどうか疑問です。また、子どもは、生まれた時から、臓器を他人に提供する、あるいは、受け取ることを決定できない存在です。また親は、他人のいのちを犠牲にして生きなければならない子供たちに対し生涯に渡り最後まで精神的身体的にケアすることはできない事も考えなければなりません。

そもそも西洋医学の発展の背景には、デカルトの心身二元論があります。「我思うゆえに我あり」とする、自我意識や理性を絶対化する考え方の基本には、「心と身体」を分け、「私抜きの知」として、客観的に物質である他人の身体を観察することで、身体を持つ機械的な原理を解明しました。（次号に続く）

### ■西真寺 行事のご案内

前住職前坊守三回忌法要六月十七日（日曜日）

報恩講

十月十四日（日曜日）

\*追伸 先日新年会ご案内の三回忌の日程が誤っていました。六月十七日が正しい日程となりますので、御報告致します。